

入選

周りの人からの親切

千葉県 高根台中学校 一年

齋藤 楓牙

僕は生まれつき耳が悪く、10万人に1人の確率で生まれる小耳症、外耳道閉鎖という障がいをもっている。両耳の障がいのため、非常に聞こえにくく不便だが、今こうして生活できているのは、両親や友達、先生方の手助けがあったからだと思う。

幼稚園に入るとき、母が先生に聞こえのことを話してくれた。そのため、困っているときに友達や先生が助けてくれ、教えてくれた。初めての友達には、耳のことを聞かれたり見られたりすることもあったが、説明すると理解してくれて嬉しかった。

年中の頃、聞こえの教室のある学校の近くに引っ越し、小学生になって聞こえの教室と1年生の学級に入った。同じクラスの人全員が初めての人で、とても不安だったが、徐々に周りの人も僕の障がいを理解し、聞こえのことを気遣ってくれた。大きな声で話してくれることや、繰り返し話してくれることは、僕にとってとてもありがたかった。

4年生から中学1年生まで、5回耳の手術をすることになり、県外の遠い病院へ一人で入院した。入院の日の朝、家を出るとき家族と離れ離れになると思うと、とても悲しかった。手術が怖い気持ちと、みんなと同じ耳ができるのかなという期待と不安があったが、周りのみんなが応援してくれたので、がんばることができた。

1カ月の入院中、コロナ禍のため母が1日30分しか面会に来られなかったが、学校の友達が連絡してくれたり、入院していた小耳症の友達と「あと何日で退院だね」と、はげまし合いながら過ごしたりしたため、さびしい気持ちが紛れ、長い入院生活も乗り越えることができた。

退院後は、久しぶりの学校で耳のことを聞かれたり、見られたりしないか不安だったが、自分が思っていたより普通に接してくれたので、ホッとした。

中学生になり、新しい環境で不安だったため、入学前に先生と何度も話し合った。先生は少しでも授業が受けやすいようにと、いっしょに考えてくれたり、耳のことを知ってもらうため自己紹介の手紙を配ってくれたりした。自分のことを打ち明けると気持ちが楽になり、友達も僕を避けずに接してくれて嬉しかった。

僕は陸上部に入部した。練習で大量の汗をかいたとき、友達から「耳につけている機械、平気？」と言われたり、顧問の先生から、「汗ふいた方が良いんじゃない？」という言葉をかけてもらった。

僕は周りの人たちに優しい言葉をかけてもらい、手助けをしてもらったことに感謝している。だから、感謝の気持ちを忘れずに、親切のお返しができるようになりたいと思う。

最後に、僕は障がいがあって不便だと思うことはあるが、不幸だと思ったことはない。聞こえにくいことで多くの方と出会い、人の優しさや温かさを教えてもらったからだ。